

# わかやま母親通信

第57号 2017年10月1日発行

発行 和歌山県母親大会連絡会 事務局 和歌山市小松原通3の20 和歌山県教育会館内  
和教組 TEL073-423-2261 FAX073-436-3243 母連メール:w\_haharen@wkn.or.jp

生命を生み出す母親は  
生命を育て  
生命を守ることをのぞみます

## 第63回日本母親大会 in 岩手(盛岡)

HP 和歌山県母親大会

## ～8月20日 全体会参加者の感想から②～

伊都 母連 S. S.

自分の目で世界の現状を見てきて、写真で訴えてきた安田さんの講演は感動しました。厳しい現状の中でも、子どもたちが希望を語っている姿に、胸打たれました。

日本の役割は、武器を持って戦うことでは決してなく、平和の実現のために積極的に世界に働きかけることだと思います。憲法を守り、実現していけるような政府であってほしい。そのために、私も頑張りたいと思いました。

日高 新婦人 I. K.

すばらしかったです。感動で胸がいっぱいになりました。

スイスでの世界大会(1955年)に、母親代表としてモンペ姿で参加した土川マツエさん(故)のこと、半月で派遣費用を100万円集めたということ(スズランの花を売った)、野党共闘のすばらしさ(知事や市長の来賓祝辞)に、胸がいっぱいになり東北のすばらしさを実感しました。和歌山も変えて行かねば!



伊都 教組 M. K.

安田さんの講演、きたがわてつさんの曲、会場いっぱいの女性パワーに元気をもらいました。難民と呼ばれる人たちも、被災者と呼ばれる人たちも、はじめからそうではなく普通の生活をしていた私たちと同じであったことを思うと、他人ごとではないと改めて思いました。一人でしようと思わず、役割分担をしながら、自分のできることをし続けたいと思いました。



## 第64回日本母親大会へ みんな連れもて行こら～

○日 時 2018年8月25日(土)～8月26日(日) ○場 所 高知県

○県独自オプション(予定) 団体バスで行って、大会前日又は大会後日に観光をしませんか?(今年は各自参加でしたので、盛岡の町〈石川啄木や宮沢賢治ゆかりの場所多し〉や岩手県内名所を観光した人もいました。

\*多くの費用が要ります。是非今からワンコイン貯金を始めましょう。

有田 新婦人 H. O.

全体会は、盛岡タカヤアリーナでありました。駅前からシャトルバスが出ていて、とても大きな会場でした。県立花巻農業高校の鹿踊りで始まり、県知事、市長の挨拶もありました。主催者挨拶は、JAの女性の方でした。何もかも、すごい、すごい…すばらしい人たちで、元気をもらってきました。

世界母親大会に、日本代表で土川マツエさんを送り出したのは、東北と知っていましたが、それが岩手だったとは知りませんでした。すごい人たちがいたことを改めて知りました。私もがんばりたいと思いました。



那賀 教組 T. T.

全国から集まった5000人を超える女性たちで満員の母親大会ならではの光景に、圧倒されるとともにワクワクした。郷土芸能の舞台は、すばらしかった。

記念講演で安田菜津紀さんが語ってくれた世界の紛争地の話は、驚くことばかりだった。シリアの人々が言ったという、「直接的な攻撃よりも怖いものは、無視と無関心だ。」という言葉が心に残った。国内の被災地の方たちも、「忘れられていくのは怖い。」と感じていると思う。

和歌山市 新婦人 M. N.



講演がとても良かったです。シリアからの難民に関するニュースを見ても「日本に何万人も来ても困るしなあ…」と、他人事になっていました。安田さんは、シリアが今よりも平和だった頃から知っているからこそ、今の、助けたくても助けられない命が失われる状況は、想像を超える、悲しくしんどい気持ちだと思います。

「助け合う」…言うのは簡単ですが、本当に手を差し伸べられる人になりたいです。

和歌山市 年金者組合 A. K.

オープニングは、花巻農業高校舞踊部による春日流鹿踊。宮沢賢治が「鹿踊りじゃぞい」とうたった伝統舞踊を若い世代が見事に受け継ぎ、会場はその躍動感に魅了された。

記念講演は、「写真で伝える世界、東北の今」と題したフォトジャーナリストの安田菜津紀さんのお話。16歳の時から訪ねているカンボジアと、義父母が被災した陸前高田、中東シリアの今を、写真と共にレポート。やはり現場で生きてきた人の言葉とその写真には力がある。被災地で今も闘う人々とシリアの人々に共通するのは、ある日突然、当たり前になっていた営みを奪われ、今も生きるための闘いは続いているのに、次第に忘れ去られ、世界から無視されているという感覚に苦しめられることだと、安田さんは語っていた。

私たちは、世界で今何が起こっているのかを知り、自分にできることは何かを考えて、行動を起こすことが必要だと痛感した。

## ～8月19日 被災地訪問レポートから②～

### 被災地訪問レポート～岩手県陸前高田市と市内見学～

那賀 新婦人岩出 N. S.

盛岡から陸前高田にバスで移動。陸前高田 戸羽太市長のお話を聞いた。

市長当選後3週間目で東日本大震災が起こり、予想を超える津波で多くの人が避難先で流された。奥様も津波に流され長い間行方不明だったと、とてもつらい話をきいた。市民とともに復興させ、困難なことがあっても、みんなの努力と応援があれば復活できるんだよと伝えられるパワースポットになりたい、と話された。

バスの中で陸前高田市の伊勢市議会議員からお話を聞き、市内を案内してもらった。被害のすごさは百聞一見にしかず。

陸前高田は、死者1556人 行方不明207人、家屋倒壊数4045棟(6割くらいにあたる)岩手県内で被害が最も多かった。

いたるところで10メートルのかさ上げ工事がされていた。

約7万本の松があったが、壊滅的な被害を受け、たった1本残った「奇跡の1本松」(塩害を受け、今はモニュメントとして保全され残されている)。

市民と行政と市議会が一体となって復興を進めている。

「道の駅 高田の松原」震災遺構見学。14.5mまで津波が来たとか。



### 被災地訪問レポート～岩手県陸前高田市と市内見学～

県母連 S. Y.

私が参加したコースは一関駅集合コース。2台のバスに分乗して陸前高田市に向かいました。バスには現地実行委員3名に加え陸前高田市議1名が同乗し、市議さんから車中震災のことや市の現状などの説明がありました。震災から6年半の時間が経過しているが、仮設住宅はいまだ600戸、その住人は1900人(現在の市の人口およそ19000人)。高台の平地といえば学校のグラウンドぐらいしかない中、仮設住宅の多くがそこに設置

され、一度もグラウンドを使うことなく卒業する子どもたちがいること、その結果子どもの肥満傾向が問題になっていることなどが語られました。

バスが最初に到着したのは、高台に新たに建設された市コミュニティーホール。ここで盛岡駅出発コースと合流し、戸羽太市長の講演を聞きました。周囲には新しい消防署、JR 陸前高田駅などが整然と並び、街の再興が始まっていました。しかし、市役所はプレハブの仮庁舎。震災で職員の 1/4 にあたる 111 名を失い、他府県からの応援の 140 名の臨時職員を加えた 400 名弱で現在市役所運営がなされているそうです。戸羽氏の講演では、ご自身も津波で奥様を亡くされたこと、その時市長の職責と夫の立場の間で揺れたこと、選択の結果起こったことへの思いや、市役所前の 3 階建ての市民会館が完全に水没したこと、そこには確定申告に訪れていた多くの市民がいたことなど、生々しい話に多くの方が涙をぬぐいました。津波では多くの方が避難先で犠牲になったそうです。過去の震災津波から想定された津波の高さは、市役所前で 50 cm から 1 m。「情報予測を最大と考えるはいけない」という教訓が強く印象に残りました。

講演聴講のあと訪れたのは、震災遺構として津波に襲われた姿のまま保存されている旧道の駅「高田松原タピック 45」です。ここも屋上だけを残して水没したのだそうです。津波到達地点 14.5m の印が赤いペンキで書かれていました。津波の際の避難施設に指定されていこの建物で助かったのは屋上に逃げた 3 人のみ。金曜日の午後 2 時 46 分、東北地方随一の道の駅は多くの人で賑わっていたはずです。真夏とは思えない当日の低い気温ともあいまって、倒れた鉄塔や建物内にそのまま残る瓦礫、周囲に置かれた津波に掘り起こされた松の巨大な根を見て、津波の恐怖が突然リアリティをもって迫ってきました。有名な「奇跡の 1 本松」は、この近くにあった 7 万本の松からなる防潮林の中で唯一津波に耐えて残った 1 本です。現在その松も塩害で枯死しており、空洞になった幹の中に真ちゅうを入れて保存しているのだそうです。7 万本の松の防潮林は、高さ 11 m の防潮堤にとってかわられていました。

プレハブの仮市庁舎周辺の高台は整備され、今年 4 月に新たにオープンした商業施設や市民図書館が盛土で嵩上げされた中心部に点在するものの、犠牲者の 7 回忌を迎える今年になっても 10 m の盛土による嵩上げ工事はまだ完了していません。両親を亡くした小学生、中学生、高校生は 40 数人、片親を亡くした子どもは 100 数人という数字や、コミュニティーが分断され重症化する高齢者の認知症などの状況を聞くにつけ、元の生活を取り戻すのにいったいどれほどの時間がかかるのかと気の遠くなる思いでした。しかし、市長やバスに同乗された市議さんからは、この困難を乗り越えてみせるという気概を強く感じました。「大人が頑張っている姿を子どもたちに見せたい。」「何とかなるということ子どもたちに示したい。」戸羽氏が講演で語った言葉です。

日本は世界で 4 番目に自然災害に対するリスクの高い国だそうです。「全く活かされていない被災地の経験を活かしてほしい。」これも市長のメッセージです。もうひとつ、市議と市長が口をそろえて訴えたことは、国の支援・対応のおざなりさでした。

## 被災地訪問レポート～岩手県石巻コース～

海草 社会福祉法人

障がい者生活サポートセンター K. U.

今回初めて日本母親大会に参加しました。

初日の分科会では特別企画「被災地訪問」で被害にあった石巻市や女川町、大川小学校等を回らせていただきました。東日本大震災から約6年半が過ぎ、メディアで報道させることも無くなり、どこまで復興が進んでいるのだろうと思いながら参加しました。

石巻日和山公園近くの海岸沿いは新地になっており、ここに約2000件の家があり、ほとんどが津波により流されたとのことでした。実際に目で見えて感じたことは震災による瓦礫やゴミの処分がまだ終わっていないこと、復興住宅は出来てきているが、実際には半分以上が空いており入っていない状態であること、ここで生活されていた方々の全てが無くなった時の絶望感等が話を聞く中で分かりました。また復興住宅の建てている場所も海が見える場所であり、実際に津波が来た場所でした。実際に津波を体験させた方はここには住みたくない気持ちが分かるなどと思い、半分以上空いている意味が分かりました。大川小学校視察では津波の怖さや被害の大きさを感じ、ここでたくさんの小学生や教師、地域の方が亡くなったと思うと何とも言えない気持ちになりました。これから裁判が始まるようですが、誰も悪くないのにとすると複雑な思いになりました。大川小学校の悲劇を繰り返さないようにも日頃から行政の方を巻き込んでの避難場所の安全確認の重要性も感じました。

私たちは震災が起こる度、その怖さを感じると思います。しかし日々の生活を送る中で忘れてしまいがちだと思います。特に和歌山県は南海・東南海震災が起こることがしきりに言われている中で、東日本大震災の教訓を忘れず伝えていくこと、日頃の備え、知識を持つこと、伝えることの大切さを改めて感じる機会となりました。そのためにも日頃から震災が起こった時にはどこにどのように逃げるか等、考えておくことの必要性を改めて感じました。まずは自分の職場でできることは何かを考えていきたいと思いません。ありがとうございました。



## 被災地訪問レポート～宮城県南三陸/気仙沼/陸前高田コース～

海草 社会福祉法人 A. K.

今回3度目の被災地。南三陸から気仙沼を経由し陸前高田をまわるコースに参加させていただきました。

2年前、プライベートで初めて被災地を訪れた時にも気仙沼と陸前高田をまわっていたので、2年経った今、町はどのようになっているのか、どのぐらい復興が進んでいるのか、この目で確認したくて南三陸コースを希望しました。

2年前と比べると少し建物が増えたかな、盛り土の高さが高くなったなど感じる程度で、大きく変わっていないという印象を受けました。埋め立て地か工事現場かと言うような広～い土地が広がり、元々あった住宅地や街が想像できません。地元の方が説明してくれてもなかなか想像できないぐらい街がまるごとなくなっている景色は津波という自然災害の恐ろしさを実感させます。その中でも地域ごとに商店街ができています。何もない土地に突如と真新しい建物が現れ、そこには人が集まっていました。そこで暮らす地域の方にとっては大切な生活の源のひとつだと思います。そこだけを見れば活気もあり、地元の人と観光客とが入り交じり復興を感じる光景ではありますが、見渡すと周りはトラックがひっきりなしに動き回りだっ広い盛り土の土地です。広く見ると異様な景色だと感じました。

再び盛んにまた整った状態になる「復興」という言葉の意味にはまだまだほど遠い状況であるとは思いますが、そこで生活している人たちと再び街と暮らしをつくらうとしている復興へ向けた力を感じることができました。東北の復興のために私たちができることは、寄付ではなく東北を訪ねることだと思います。その地のものを食べたりお土産を買ったりすることが、現地の人の生活につながると思いました。

.....

- \* 全体会場のトイレが少なくて行列ができ、大変でした。(数名、ご意見有)
- \* 案内の方がたくさんいて、安心した。みなさん、とても丁寧に対応してくれた。
- \* 盛岡駅から会場まで案内などが飾られているのを見て、初参加でもありうれしかった。
- \* やはり岩手県は遠くて旅費がたくさんいったけれど、初めて岩手県へ行けてよかった。
- \* 分科会場が分散していたので、悩んでしまった。近い会場を選んでしまった。
- \* 和歌山からの参加者とは、全体会場で初めて会えたが、もっと交流があってもいいのと思った。顔も名前も知らずに過ごしたのは、少し残念だった。
- \* 西牟婁からは、岩手まで本当に遠かった。「自家用車での参加なら可能では。」と、声をあげてくれた方がいて、ありがたかったし自由に楽しく行けたが、随分負担をかけたと思う。

## ～8月19日 分科会参加者の感想から②～

### 1 行列のできるしゃべりカフェ 西牟婁 新婦人 T. M.

岩手の母親大会で、こんなにも多くの若い人たちが集まるカフェがもたれたことに感動しました。50歳以下という年齢制限にもかかわらず、大目に見て入場させていただいたことに感謝しました。



専門家の発言もためになる事が多かったし、グループごとのおしゃべり会でも、いろんな立場の人の話が聞けて良かったです。いただいた資料も大切にしたいと思います。

### 12 人間の復興担う女性たち—東日本大震災から学び生かすこと

那賀 教組 M. K.

女性ならではの視点から、東日本大震災からの復興の取組みを聞かせていただきました。分科会には、全国からの参加者がいので、東日本大震災からの復興の取組みだけでなく、全国の災害からの復興の取組みもきかせていただき、大変勉強になりました。

自分の地域で起こったときに、復興へどう取り組めばいいのか、参考になりました。

那賀 教組 Y. K.

避難所の現状や女性の視点の必要性など、具体的な問題良く分かりました。避難所には、被災者の半数しかいない。乳幼児、病人、障害者のかたなどは、様々な事情で、大きな避難所に居ることが出来ず出ている。しかし、支援物資は、避難所に指定されたところでない支給されない、などなど。

東北に行かせて頂く機会などめったにないので、良い経験をさせて頂きました。

西牟婁 和高教 E. K.

もりおか女性センター長の平賀恵子さんから、2006年からの運営・取組み・そして大震災後の支援活動から見えてきたもの、今後の課題までをお話し頂きました。

避難所巡りをする中で、弱い立場に置かれる小さい子ども・病人・高齢者・障がい者の多くは、避難所に来られていないことに気づき、本来一番支援の必要な方たちが、安心して避難できる場所の必要性を痛感し、さらに、支援物資に女性の視点がないため困っている女性が多いことからデリバリーケアを開始されたと聞き、そんな細かい活動が出来ていたことに驚きました。

行政復興会議メンバーには女性が少なく、地域での町内会長、老人会などのリーダーも男性が多いため、避難所などでの運営にも女性に視点が足りない現状を踏まえ、今後は各地で今まで以上に地域防災に力を入れるとともに、あらゆる分野に女性の参画が必要で、地域の中に女性リーダーをつくっていく、日頃から男女の協力体制が出来ていることが大事であると、平賀さんのお話から学ばせていただきました。

全国各地の参加者からのたくさんの報告を聞き、女性の大きな力を改めて感じました。今は、どこでどんな災害が起きるか分かりません。自分の住む地域で、少しでも女性たちの意見が組みあげられるように努力したいと思います。

## 23 啄木、賢治と憲法を語る

### 対談 石川啄木記念館館長と宮沢賢治記念館学芸員

和歌山市 年金者組合

K. I.

小森氏の講演はこれまでも聴いたことはあるが、いつも立て板に水のごとく痛烈に安倍批判をやっているのけるので、気持ちよく聴くことができる。宮沢賢治も石川啄木も東北という地に生まれ育ち、科学的認識に加え宗教的な思いを強く持っていたが、何しろ時代が時代なのではっきりとは政治批判を書くことが出来ない。賢治の『注文の多い料理店』に二人の紳士は、兵隊姿でトレンチコートを着ているが、これは軍服である。そんな彼らが最後には食べられてしまう手前でしわくちやの紳士になって終わる、という童話になっているという解釈は興味深かった。

第2部の対談は、自分が館長であったり学芸員であったお二人の、郷土の文学者の作品自慢ぶりがとても面白かった。賢治はこう書いていると言え、啄木はこんな風に詠んでいると、彼らに対する愛情いっぱい丁々発止のやりとりを展開してくれた。

2020年を新しい憲法が施行される年にしたいと首相は発表している。自衛隊の存在を明記する条文を加える考えを明らかにしているのだ。小森氏は、この日も「日程を決められ、変えられようとしている憲法だが、我々一人ひとりが立ち上がって抵抗していくしかないのだ。」と話された。



改めて、戦争できる国にされてはたまらないという怒りが高まって、私たちは黙ってはいけない、行動しなければいけない、という思いを新たにしました。

## 3 改訂学習指導要領で学校はどう変わる—教育の機会均等 学ぶ権利

県母連 M. N.

記録係として、記録の要約のため分科会の討論を何度も反芻する作業があり、自分なりに実りの多い大会となりました。分科会は退職・現職の教職員、子育て中、孫育て中、地域の新婦人の会員さんなどが多く参加していました。

討論では、「話すことがない」「人が集まらない」と教育懇談会が無くなったり、趣旨が変わってしまった地域がある一方で、スーパー前でチラシを配って教育カフェを少数でも始めた地域の話。教科書採択の傍聴に定員があったが、要望と傍聴を繰り返して、希望者全員が傍聴できるようにした取り組み。議会の文教委員会の傍聴や、地域の学校公開を見に行くなど、地域から働きかけていく取り組み等々話されました。また、いじめで自死した息子さんのお母さんのお話では、学校や第三者委員会との関係に辛い思いを抱える事を話して下さい、聞いている方も辛くなりました。



困難は多いけれど、地域・保護者・学校が手をつなぐ取り組み、お互いを励ます取り組みが求められているし、それぞれの困難や問題はきちんと伝わるように話す努力も必要だと思いました。来年度から始まる道徳の教科化に対する危惧も多く出されていました。地域からどう子どもたちと教育を守っていくのかを考えさせられる分科会でした。